

年代記と地理書からみたマラッカ王国

南 出 眞 助

Malacca in Historical and Geographical Descriptions

Shinsuke MINAMIDE

1. マラッカの地理的位置

(1) マラッカ海峡航行史

マラッカ海峡は、古くから名の知れたアジア航路最大の難所である。その理由は、東西の季節風が海峡の中央付近で止んでしまうことや、スマトラ島側に発達した複合デルタが海面下に浅瀬を形成しており、大型船の航路がマレー半島寄りに限定されること、さらにそれらの悪条件が重なり動けなくなった帆船を狙って海賊が横行することなどにあった。

したがって、古く紀元前後頃のベンガル湾と南シナ海とを結ぶ東西交易ルートは、マレー半島のくびれた部分を陸路で横断するのが一般的であった¹⁾。紀元前2世紀末に前漢の武帝が南越を滅ぼして以後の広州の漢墓には、大量のインド系ビーズが副葬されており、タイ湾に面するメコンデルタのオケオ Oc Eo 遺跡からは、インド系ビーズのみならず紀元2世紀のローマ帝国の硬貨も出土している。さらにマレー半島西岸のクローン・トーム Khlong Thom 遺跡は、インド系ビーズの植民的製造拠点とも推定されている²⁾。しかしそのような西方の遺物・痕跡は、マラッカ海峡沿岸からはまったく出土していない。

紀元2世紀頃にアレクサンドリアで作成されたプトレマイオス Claudius Ptolemaeus の『地理書』*Geographia* 付属地図も注目される。インドの「外側」(ガンジス川以東) *India extra Gangem*、インド洋 *Mare Indicum* の東端に近い海域に、インド半島より大きな「黄金の半島」*Aurea-Chersonesus* が赤道 *Equinoctialis* 以南まで伸び、その東側が陸地によって封じられているように描かれている³⁾ (第1図)。これを桜井由躬雄は「マレー半島は、インド亜大陸をはる

1) 伊東照司「義浄と仏逝国-マライ半島の古代文化」『歴史的文化像』、新泉社、1980年。217～244頁。

2) 横倉雅幸「貿易と港市国家」季刊考古学66-特集日本と南海の考古学-、1999年。51～54頁。

3) L・パガーニ解説、竹内啓一解説翻訳、織田武雄・高橋正・船越昭生・増田義郎日本版解説『プトレマイオス世界図-大航海時代への序章-』、岩波書店。1978年。解説者はこれをマレー半島と解し、その東側の湾入部 *Magnus Sinus* をシヤム湾ないしシナ海とみなしている。

対岸のマレー半島にまで影響力を持っていた。マラッカ海峡が安全に航行できたのは、海峡の両岸がともにシュリーヴィジャヤの支配下にあったからである⁸⁾。また 851～852 年頃に記されたアラビア商人の記録である『シナ・インド物語』*Akhbār al-Sīn wa al-Hind* 第 1 巻に登場する経由地のカラフ・バー *Kalah-bār* が、訳注者藤本勝次によればマレー半島西岸に比定される⁹⁾ことと、その地がザーバジュ国 *Zabaj* すなわち上記のシュリーヴィジャヤの支配下にあることからみて、やはりマラッカ海峡航行ルートが想定される。

その後も、マラッカ海峡一帯には諸王国が並立していた。時代は下るが、1267～92 年の旅行を記したヴェネツィア商人マルコ・ポーロ *Marco Polo* (1254～1324) の口述回想録をまとめた『東方見聞録』(原題は『世界の記述』*La Description du Monde*) では、中国からの帰路に通過するペントラン島¹⁰⁾が、シンガポールーインドネシア国境に位置するピンタン島であり、そこからフェルレク(スマトラ島東部のプルラク)、バスマン(同バサイ)などの沿岸諸国を歴訪しているので、マラッカ海峡を通過したことは明らかである。またアラビア商人イブン・バトゥータ *Ibn Battuta* (1304～1368) の 1325～49 年にわたる旅行を 1355 年にまとめた『大旅行記』(原題は『諸都市の新奇さと旅の驚異に関する観察者たちへの贈り物』) では、スマトラ島のスルタンの厚意によりジャンク船一艘を得て出帆し、「二一夜 [の間]、スルタンの国に沿って航海し、ムルジャーワに着いた」¹¹⁾とある。ムルジャーワはマレー半島東岸の町とみられるので、これもマラッカ海峡を航行したと推定される。しかし当時の文献に、マラッカの名はまだ出てこない。

(2) マラッカ王国の成立

このマラッカ海峡中央部に 14 世紀末期に成立したのがマラッカ王国である。その初代王パラメスワラはスマトラ島パレンバン出身の王子であり、シュリーヴィジャヤ王統の後裔とみられるが、マレー半島沿岸の海賊をまとめながら北上し、マラッカ王国の基礎を築いていった。その王宮の地にマラッカ川河口部が選ばれた理由について、鶴見良行は『マラッカ物語』¹²⁾において、「内陸部特産の商品はなかったから、そこにいかなければならない特別の場所はなかった。船の停泊できる河口なら、どこでもかまわなかった。(中略) トメ・ピレス(筆者注: ポルトガル人、後述)のいう『貿易風の始まり終わるところ』ならば、マラッカならずとも、

8) ザイナル=アビディン=ピン=アブドゥル=ワーヒド編、野村亨訳『マレーシアの歴史』*Glimpses of Malaysian History*、山川出版社、1983 年。24～33 頁。同書ではシュリーヴィジャヤを「制海政国家」(著者による造語 *thalasso + cracy* の野村訳)と表現している。

9) 作者不詳、藤本勝次訳『シナ・インド物語』関西大学東西学術研究所訳注シリーズ 1、関西大学東西学術研究所、1976 年。12 頁ほか。

10) マルコ・ポーロ著、愛宕松男訳注『東方見聞録』1(東洋文庫 158)、平凡社、1970 年。140～161 頁。

11) イブン・バトゥータ、家島彦一訳注『大旅行記』6(東洋文庫 691)、平凡社。2002 年。403 頁。

12) 鶴見良行『マラッカ物語』、時事通信社、1981 年。123 頁。

海峡内ならいくらでもあった」と述べている。広大な領土の生産力によって支えられる大陸型国家ではなく、港における交易活動こそが国家経営の基盤をなす、歴史学者がいうところの「港市国家」port polity¹³⁾の典型であろう。

マラッカ王国は8代続いたのち、1511年にポルトガル艦隊の砲撃を受け、滅ぼされた。以後ポルトガル領となるが、1641年にはスマトラ島北西端のアチェ王国の侵攻で弱体化したときにオランダに取って代われ、さらに1795年にはイギリスに譲られた。しかしこのような転変の歴史は、その副産物として多面的な記録を残すことにもなった。マラッカ王国の創始から崩壊に至るまでをマレー語で綴った王統記が伝わるのをはじめ、交易の東側の主導者であった中国側の記録も残り、西側のヨーロッパ諸勢力までもが、それぞれにマラッカ王国時代の残滓を書き留めた。このようにマラッカ王国に関しては、王国側、中国側、ヨーロッパ側の三者の文献を比較検討することができる点で大変興味深い。つぎにそれらの資料について、先学の成果を引用しつつ簡単に紹介しておきたい。

2. マラッカ王国の基本文献

(1) 王国側文献

編著者不明『マレー年代記』 *Sejarah Melayu*

言語学的にはアラビア文字の変形とされるジャヴィ Javi 文字を用いた古典マレー語（ムラユ語 bahasa Melayu）による王統記であり、1511年のポルトガル占領直後にトメ・ピレスによって記された『東方諸国記』にも、その内容に相当する伝承が随所に紹介されている。『東方諸国記』の邦訳版¹⁴⁾には、生田滋によるつぎのような書誌が付されている。

本書はマラッカの歴史を述べたもので、マライ文学中抜群の位置を占めるものである。アレキサンダー大王の東方征服に筆を起し、パレンバン王家の起源など神話的な記述、マラッカの歴史に関する詳しい記述がある。しかし本書は歴史書ではなく、文学作品であることに注意しなければならない。まず一五三六年に恐らくジョホールで執筆され、同年六月のドン・エステヴァン・ダ・ガマのジョホール攻撃の際にポルトガル人によって持ち去られたものと思われる。この写本が十七世紀に入って、どのような経路でかは判らない

13) J. Kathirithamby-Wells and J. Villers eds.: *The Southeast Port and Polity, Rise and Demise*, Singapore University Press, Singapore, 1990. 鈴木恒之「東南アジアの港市国家」『岩波講座世界歴史』13、岩波書店、1998年など。なお生田滋は「港市」の語について、つぎの注14)の訳書解説において、「各地に存在した港と、それに付随した都市」を「便宜上これを港市と呼ぼう」と提唱している。

14) 生田滋・池上岑夫・加藤栄一・長岡新治郎訳注『トメ・ピレス東方諸国記』大航海時代叢書V、岩波書店、1966年。

が、ふたたびジョホールにもたらされ、一六一二年にこれを基礎とした改訂本が出て、広く流布し、後にも種々の添加が行われた」（『東方諸国記』600頁。以下引用文は『東』と略す。下線は筆者）

ここに記される1536年稿本とは、ロンドンの王立アジア協会が所蔵する「ラッフルズ写本18号」（*Raffles MS. No 18*, Royal Asiatic Society, London）である。しかし、マラッカ王国の残党が逃亡先のジョホールで1536年に初めて稿を起こしたのであれば、1512～15年にマラッカに滞在し取材を行ったトメ・ピレスがその内容を紹介するのはおかしい。したがって「ラッフルズ写本18号」以前にも、異本や類似の口承文芸等が古くから複線的に存在したと考えざるをえない。ちなみに「年代記」Annalsと訳されるが、年紀そのものに関する記述は乏しい。史実のみならず伝承も含み、叙述も物語めであるという点では、日本の国生み神話に始まる『古事記』にひき較べることもできよう。

この『マレー年代記』の翻刻や書誌学的検討は、イギリス領時代の系譜を引く「王立アジア協会マレーシア支部」The Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society（以下MBRASと略す）を中心に進められてきた。1938年初版のリプリント版として刊行された*Sejarah Melayu: The Malay Annals*¹⁵⁾には、1909年（第2版）のローマ字表記マレー語による「ラッフルズ写本18号」全文が収録されており、マレー古典文学研究家のウインステット R. O. Winstedt（1878-1966）による解題“An Outline of the Malay Annals contained in Raffles MS. No. 18”および、2本の書誌学的検討“The Date, Author and Identity of the Original Draft of the Malay Annals”, “The Preface of the Malay Annals”（いずれも*Journal of MBRAS*, Vol. 16, 1938所収）、その他の研究論文を再録している。

ウインステットによるマレー関連文献の解題集としては、1940年初版のリプリント版である*A History of Classical Malay Literature*¹⁶⁾もあり、ここでは『マレー年代記』より古くスマトラ島東岸のパサイで記され、マレー古典最古の文芸作品と評価される『パサイ王の物語』*Hikayat Raja-Raja Pasai*¹⁷⁾などについても考証されている。ウインステットの分析によれば、これはパサイ王国が滅ぼされた1350年代以降も書かれ、その内容は『マレー年代記』の第7章と第9章に引き継がれている。このように『マレー年代記』は単独に成立したのではなく、周辺王国史との複合的継承関係において成立したとみるべきであろう。

日本で『マレー年代記』に着目したのは西村朝日太郎であった。第二次世界大戦中に出版さ

15) *Sejarah Melayu: The Malay Annals*, MBRAS Reprint No. 17, The Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society, Kuala Lumpur, 1998.

16) *A History of Classical Malay Literature*, MBRAS Reprint No. 12, The Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society, Kuala Lumpur, 1996.

17) 野村亨訳注『パサイ王国物語－最古のマレー歴史文学』（東洋文庫690）、平凡社、2001年。訳注者の野村は、タイトル中の‘Raja’は一個でよいと注している。

18) 西村朝日太郎『馬來編年史研究（スヂャラ・マラユ）』東研叢書4、東亜研究所、1942年。

れた『馬來編年史研究 (スチャラ・マラユ)』¹⁸⁾は、ウインステット等の先行研究を引用しつつ、成立年代・作者・内容などに関する独自の分析を展開し、本文要約とその補注を掲載したものであった。さらに別枝篤彦はそれらの成果を総合し、地理的な側面からマラッカ王国成立の背景を論じた¹⁹⁾。

一方、東南アジア政治史の観点からの分析は急速に進展し、和田久徳は『マレー年代記』から読み取れる当時の国家体制に論及し²⁰⁾、家島彦一は『マレー年代記』と『パサイ王の物語』の引用関係を、14世紀に広がる周辺諸王のイスラーム改宗伝承全体の中で位置づけた²¹⁾。これらの王国史が、ムラユ世界におけるイスラームの歴史的正当性を主張するために利用されたことは事実であろう。弘末雅士は、それを東南アジアの港市国家に共通する特徴として総合化している²²⁾。

このように『マレー年代記』をめぐる研究史は厚く、到底ここに紹介しきれものではないが、小稿の目的はその地誌的記述の検討にあるので、もっぱらトメ・ピレス『東方諸国記』の邦訳版に収録された引用文を抽出して考察をすすめたい。

(2) ポルトガル側文献

① トメ・ピレス『東方諸国記』(原題は『紅海からシナ人までを取り扱う東洋の記述』*Suma Oriental que trata do Maar Roxo ate os Chins*, 1515?)

訳注者の生田滋の解説によれば、ピレス Tomé Pires (1466?~1524?) はポルトガル初の中国派遣大使であった。マラッカ占領直後の1511年4月にリスボンを発ち、9月からインド在住の商館員として勤務。1512年6月にはインド総督で艦隊司令官のアフォンソ・デ・アルブケルケ Afonso de Albuquerque の誘いでマラッカに入り、1515年1月まで2年半にわたって滞在していたのである。したがって本書は、短期間の寄航に付随するエッセイなどではなく、文献渉猟と地元民からの直接の聞き取りにもとづく、きわめて信憑性の高い内容を保持している。本書「第六部マラッカ」(『東』377~498頁)の冒頭には、自らが収集した資料の出典をつぎのように記している。

ここに述べるのは数人の著者によるマラカの町の起源〔の物語〕である。そして多くの人が確認したことから真実が集められたのである。ジャオア人(ジャワ人)の意見によれ

19) 別枝篤彦「マラッカ—その成立と発展—十五世紀のイスラーム王国時代を中心として—」、史苑 23-2、1963年。1~23頁。

20) 和田久徳「東南アジアの社会と国家の変貌4 マラッカ国の政治と社会」『岩波講座世界歴史13』、岩波書店、1971年。474~487頁。

21) 家島彦一「西からみた海のアジア史」、尾本恵一・濱下武志・村井吉敬・家島彦一編『海のアジア① 海のパラダイム』、岩波書店、2000年。93~97頁。

22) 弘末雅士「東南アジアの港市国家と後背地」佐藤次高・岸本美緒編『地域の世界史9 市場の地域史』、山川出版社、1999年。92~126頁。

ば、マラカには次のようにして人が住み始めた。かれらはそのことをかれらの年代記の中に記入し、人々はそれを広く確認している。ジャオア人は次のように断言している。かれらの〔紀年を〕われわれのそれに計算すると、紀元一三六〇年にジャオア人に一人の王がいた。（『東』377頁。〔 〕内は訳注者による。下線は筆者）

下線部の記述から明らかのように、1536年の「ラッフルズ写本18号」以前から『マレー年代記』に相当する原本があったことは確実であり、たとえその現物をピレスが確認していなくても、人々の間に口承文芸として広く流布していることが分かる。したがってここに述べられる「かれらの年代記」とは、むしろ後世の改変が加えられる以前の、より原初的な『マレー年代記』の形態をとどめているともいえる。

②ジョアン・デ・バロス『アジア史』（原題は『ポルトガル人が東方の海と陸の発見と征服に際して行った数々の行為に関するジョアン・デ・バロスの「アジア』』、第二編初版の綴字法では *Segunda Decada da Asia de Joã de Barros dos feitos que os Portugueses fizeram no descobrimento e cõquista dos mares e terras do Oriente*, Lisboa, 1553

本書はポルトガル政府のインディア館商務官を長年務めたバロス（João de Barros, 1496～1570）による、ポルトガルの東方進出に関する公式年代記であり、第一編～第四編のうちマラッカ攻略を記した第二編は、ほとんどが艦隊司令官アルブケルケの戦記（1506～15）に飾られている。『東方諸国記』と同じ叢書の邦訳版²³⁾からその体裁をみれば、当時の公文書の書式であろうが、各章には一目で内容が判るような長大なタイトルが付されている。マラッカに関する「第六部」は「マラカ王国の占領と、アフォンソ・デ・アルブケルケが一五〇一年および一五〇二年になしたその他のこと」であり、その「第一章」は「マラカ王国の地勢、マラカ市に人が初めて住むことになった事情、およびマラカ市の取引と商品について」と題されている。

つまり、過ぎ去った事件を順に記録するだけでなく、現地の状況を詳細に伝えようとしている点において、単なる年代記ではない、すぐれた地理書ともいえる。しかもそこに描かれるマラッカは、占領直後の、まだ王国の名残りを色濃く残すマラッカである。「第一章」冒頭には、歴史に関する情報が、文献ではなく伝承に依拠していることが述べられている。

マラカ市が創設された正確な時期については、この市に住んでいる人びとのあいだにも、結局、われわれの知り得るような記録はない。ただ、彼らのあいだで一般に言われているところによると、われわれがインディアへ進出した頃には、この地に人が住みつくようになって二五〇年あまりの歳月が流れており、マラカ市が創設されたのはつぎのような事情によるという。（『アジア史』4～5頁。以下引用文は『ア』と略す。下線は筆者）

23) 生田滋・池上岑夫訳注『ジョアン・デ・バロス アジア史二』大航海時代叢書（第Ⅱ期）3、岩波書店、1981年。

さらにバロスは、15世紀以降、各地で流布していたと思われるプトレマイオス図写本にも言及している²⁴⁾。

このあたりに関して、もしプトレメウ〔プトレマイオス〕の地図に信をおくとすれば、このシンガプラ〔シンガポール〕の地こそ彼が「大岬＝グランデ・プロモントリオ」と呼び、彼がある地点への距離を語るときにきわめてしばしばその起点としたザバ市があるとしているところとなるはずである。というのは、マラカ市が誕生するまでは、インディア〔シンガプラとあるべきである〕より西方の海や、インディア〔同上〕より東方の海、すなわちシアン〔シャム〕、シナ、ショアンパ〔チャンパ〕、カンボジャの各地方、さらにはこの東方にある限りの島々から船で来る人びとは、例外なくこのシンガプラ（その位置から見てこれがプトレメウの言うザバであろう）に来ていたからである。（『ア』5頁。
〔 〕内は訳注者による。下線は筆者）

絵図解釈や位置比定の当否はともかく、マラッカ海峡の重要性についてのバロスの深い歴史的かつ地理的な洞察が表れているといえよう。続いてバロスは、季節風の特性についても詳細な解説を付している。なおマラッカ市街地の地誌的記述については、訳注者の生田滋による『東方諸国記』との詳細な比較がなされ、マラッカ研究に寄与するところが大きい。

③エマニュエル・ゴディーニョ・デ・エレディア『マラッカと南インドの記述』*Declaracam de Malaca e India Meridional com o Cathay em III Tract, 1613*

エレディア Emanuel Godinho de Eredia (1563～1629?) はマラッカ生まれのポルトガル人で、のちにインドのゴアで教育を受けて地図官に任用され、精確な実測図を多数作成した（『東』599頁補注）。本書にはミルズ J. V. Mills による1930年英訳のリプリント版があり、王立アジア協会マレーシア支部から刊行されている²⁵⁾。これにはマラッカ周辺の手描き図や大縮尺の実測図が収録されており、大変貴重である。エレディアは地図学者としての素養も深く、プトレマイオス図東端部の誤謬を指摘するだけでなく、中国以北の海岸線に関する修正案まで提示している。

本書中のマラッカ関係図はつぎの6点である。（〔 〕は英訳版所収頁）

- (a) Malaca Antiga 古マラッカ図〔19頁左〕：手描き想像図。中央の丘に旧マラッカ国王パラメスワラ Permicuri の宮殿跡が示されている。
- (b) Planta de Fortificacam da Cidade de Malaca マラッカ要塞図〔20–21頁〕：実測図。

24) Egon Klemp (ed) : *Asien auf Karten von der Antike bis zur Mitte des 19. Jahrhunderts*, Leipzig, 1989. は1477年版本 *Cosmographia* を掲載。リチャード・テイラー・フェル著、西村幸夫監修安藤徹哉訳『古地図にみる東南アジア』、学芸出版社、1993年によれば、アルプケルケもプトレマイオス図を認識していた(9～16頁)。

25) J. V. Mills : *Eredia's Description of Malaca*, MBRAS Reprint No. 14, 1997.

つぎの (c) の部分拡大図で、要塞内の建物や道路の描写が詳しい。

- (c) *Planta da Cidade e Pouo Acoens de Malaca* マラッカ市街図① [20 左頁] : 実測図。要塞 *Fortaleza* を中心に、マラッカ川東岸 *Yler* と西岸 *Upe* の集落分布、中国人居住区 *Campon China*、ジャワ人居住区 *Campon Java* などを描き分ける。
- (d) (タイトルなし。描写範囲は (c) よりやや広い) マラッカ市街図② [22-23 右頁] : 実測図。(c) 図と比べて省略的だが、市街地西端には (c) 図にない描写がみられる。
- (e) (タイトルなし。描写範囲から推測して *Destricto de Malaca* マラッカ地方図① [22-23 左頁] : 海岸部のみ実測図。ほぼ旧マラッカ王国の直轄地の範囲が、海に面した半円形で描かれる。東はムアル川 *Rio Muar*、西はパナジム川 *Rio Panagim*。山間部は不正確だが、*gano ledam* (現地では霊峰とされる標高 1276 m の *Gunong Ledang*) 付近が北限とみられる。
- (f) (タイトル部分的に判読困難。推測では *Discripsao Chorographica do Scrlao de Malaca Anno 1602* マラッカ地方図②1602 年 [24-25 右頁] : 範囲はほぼ (e) 図と同じ。(e) 図と比べてやや簡略的。

なおプトレマイオス図のマレー半島部分を考証したものはつぎの 2 点。

- (g) *Ptholemeo XI Tabula de Asia* プトレマイオス・アジア図 [24-25 左頁] : 部分引用図。黄金半島 *Chersoneso Aureo* をマレー半島に宛てている。
- (h) *Ptholemeo Tabula de Asia XI Reformada* プトレマイオス・アジア図修正案 [24-25 右頁] : 部分引用図の上から、中国 *China* で東へ湾曲する海岸線を 90° 近く北へ伸ばし、朝鮮半島 *Coria* や日本列島 (形のみ、注記なし) を加筆修正したもの。

これらの地図類は、マラッカ王国の領域性に具体的イメージを付与してくれる資料といえよう。

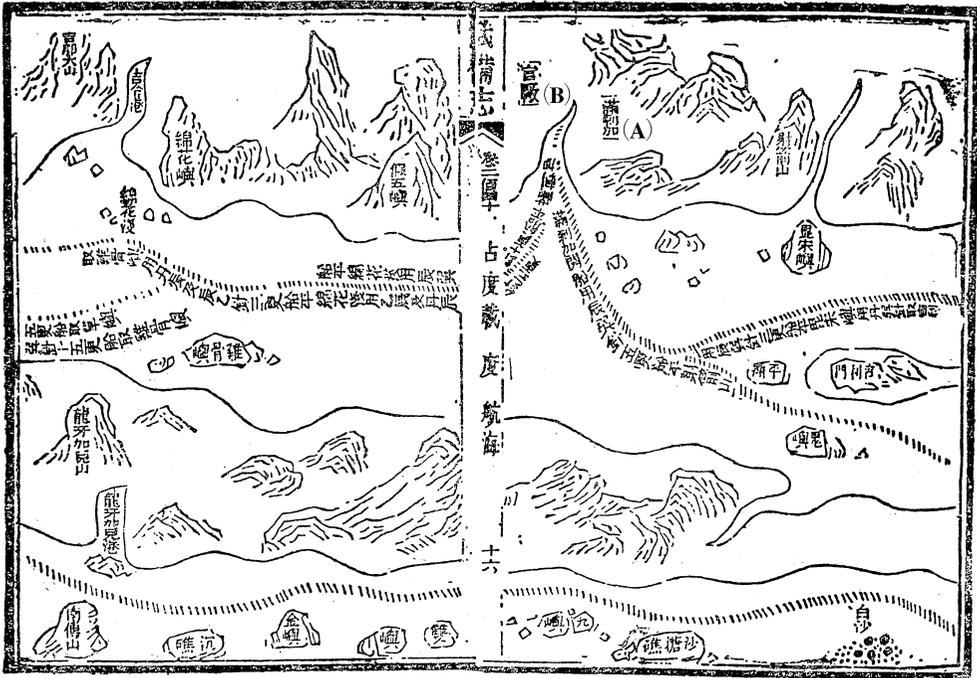
(3) 中国側文献

馬歙『瀛涯 (えいがい) 勝覧』

馬歙は中国人ムスリムで、明の永楽帝の時代に 7 回行われた「鄭和の西洋下り」(1403~33 年) に何度か通訳官として随行しているが、本書は第 4 次遠征 (1413~15) の記録であり、初版序文に永楽十四年 (1416) の年紀がある。各国ごとに地勢・産業・風俗・産物などを記す構成で、その中に「満刺加 (マラッカ) 国」の項がある。ポルトガル側の文献が 1511 年の征服後に作成されたのに対し、本書の成立はヴァスコ・ダ・ガマがインド洋に登場する 1498 年よりさらに 82 年も古く、成立後まもなく明と通商を始めたマラッカ王国の同時代的な記録として貴重である。また中国書の常として、年紀記載もきわめて正確である。

本書の邦訳版²⁶⁾には、のちの遠征に随行した費信による正統元年 (1436) の『星槎勝覧』の

26) 小川博編『馬歙瀛涯勝覧』吉川弘文館、1969 年。同改題『中国人の南方見聞録瀛涯勝覧』、1998 年)。62~70 頁



第2図 『武備志』にみる「滿刺加」(A) および「官廠」(B)の注記(注28)文献による)

訳文も添えられているので比較対照に便利である。『瀛涯勝覽』の日本への導入は古く、新井白石(1657~1725)は私家版写本を有しており、世界地理書である『采覧異言』²⁷⁾にも引用している。また中国でも、茅元儀が天啓二年(1621)に編集した『武備志』巻二四〇所収の24葉の地図は、冒頭に「宝船廠より開船し、竜江関より水に出で、直ちに外国諸番に抵(いた)る図」と題され、一般に『鄭和航海図』として知られているが、第十三葉には「滿刺加」の表記がみられる²⁸⁾(第2図)。

これらの中国側文献が、いつ頃からヨーロッパ側に渡ったか定かではないが、『アジア史』には、「シナ刊コスモグラフィア」²⁹⁾すなわち中国側の世界地理書が参照されている。このように鄭和の遠征についても、『瀛涯勝覽』その他の文献についても、中国、ヨーロッパ諸国、日本それぞれにおいて膨大な研究の蓄積があるが、小稿ではそれらを紹介する紙数もないので、もっぱら本文から適宜地誌的記述を引用するにとどめたい。

27) 山村才助著『訂正増訳采覧異言』下、青史社、1979年。909~913頁。

28) 向達校注『西洋番国志・鄭和航海図・両種海道針経』、中外交通史籍叢刊、中華書局(北京)、2000年。

29) 海野一隆「パーロス『アジア十巻書』所引のシナ刊コスモグラフィアなるものについて」(同『東西地図文化交渉史研究』所収)、清文堂出版、2003年。583~597頁。

3. マラッカ王国の空間構造

(1) 王国領の多重構造

なぜマラッカの地が選ばれたのか。あるいは鶴見良行が述べるように「どこでもかまわなかった」のか。『東方諸国記』に引用される『マラヤ年代記』の記述によれば、初代王パラメスワラがシンガポールで5年間を過ごし、水上生活者のセラテ人（Selat = 海峡）の協力を得てマレー半島西岸を北上しつつ、最初に着目したのは、マラッカより約40 km 南方のムアル Muar 川河口であった。ムアル川はマラッカ川より大きく、かなり上流まで遡航できる。そのためヨーロッパ人による初期のマレー半島図では、ムアル川が半島東側まで突き抜けているように描かれているものも少なくない³⁰⁾。後背地も広く、港としては有利なように思われる。『東方諸国記』は、パラメスワラによるムアルでの活動をつぎのように伝えている。

妻のパラミスレと千人の人々とを伴ってムアル河に入ると、パラミスラは自活するために密林を切り倒して畑を作り、樹木を植え、果樹園を作りはじめた。彼は同地で六年を過し、生活のために必要な品々を栽培し、漁業に従事し、時にはムアル河に真水をとりに来るシャンパナを襲っては掠奪していた。（『東』383～4頁。下線は筆者）

パラメスワラは、半島の諸民族を軍事力で圧倒して一気にマラッカを目指したのではなく、ムアルに定住しセラテ人とともに貿易船の動きを観察していたのである。

盗賊たちは、生活のために時々漁業をして、陸地に小屋を持ち、かれらの妻子と共に、今日マラカと呼ばれている山の近くに住んでいた。そこには現在有名なマラカの要塞がある。パラミスラがムアルに住んでいた頃、これらのセラテ人は地理に詳しい人々であった。（『東』385頁。下線は筆者）

このように、パラメスワラにマラッカ移住を提案したのもセラテ人であった。

彼らはしばしば上記のマラカ河で魚をとって、海から一レグワ（約7 km）ないし二レグワ遡った所に広い野原と良い水のある広い場所を発見した。そしてこのような場所が大きな集落を作るのに適していて、広い畑に稲を植えることができ、果樹を植え、家畜を飼育することができるのを見てとった。（中略）そこに彼らの根拠地を作り、ビエタン（訳者注によればエレディアの地図にブレタン Bretan がある）という名前をつけることを定めた。それはセラテ人の言葉で「広い野原」という意味である。彼らは上記の場所に移動する前に、ムアルにいるパラミスラに知らせ（以下略）、（『東』386頁。下線は筆者）

30) たとえば1567年のオルテリウス Abraham Ortelius の地図、1598年のラングレン Henricus Florentis Van Langren の地図、1606年のメルカトール兄弟 Mercator の地図などに表記されるムアル Muar 川は半島東側に突き抜けている（前掲注26）、Klemp）。

海民ともいうべきセラテ人が、マラッカ川流域の地理に詳しくしたのはなぜだろうか。『アジア史』は、セラテ人とマラッカの先住者である「マライ人」との間で混住化が進んでいたことをつぎのように伝えている。

セラテのなかには女性が少なかったため、(親しくなったマライ人の) 女性を仲立ちにして一つの集落に住むようになり、それぞれ自分の慣れ親しんでいる生業によって助け合うようになった。すなわち、セラテは海から、マライ人は陸から、それぞれの産物を持ってきたのである。(『ア』8頁。()内は訳注者による。下線は筆者)

このような経過から推測すれば、パラメスワラは当初からマラッカを理想的な王城の地と想定していたとは考えにくい。彼に追従したセラテ人の助言がなければ、そのままムアルにとどまった可能性が高い。パラメスワラの庇護の下でセラテ人の活動範囲が拡大した結果、マラッカに定住地と食料供給拠点を求めざるを得なくなったと考えるのが自然であろう。

では、マラッカ川の河口から7~14 km 遡ったブレタン **Bretan** とは、どこに位置していたのだろうか。『東方諸国記』によれば、パラメスワラがシンガブラに滞在していた頃の息子のシャケン・ダルシャー(イスカンダル・シャー)は「このマラカの山」(『東』392頁)を希望して丘の上に王宮を造営したが、シャケン・ダルシャーと中国人の王妃(と伝承される)との間に生まれた王子ラジャ・プテはブレタンに住み、「マラカまでは潮に乗って一時間で下って来られた」(『東』407頁)。「潮に乗る」すなわち感潮河川域であるなら距離はさほど遠くなく、発音の近似性からみれば、マラッカの中心部から北西に直線距離で6~7 km 隔たったベルタン(**Bertam** 柏淡)に該当する可能性が高いのではないかと推測される。

2代目シャケン・ダルシャーの王位を継いだ3代目は、『東方諸国記』の記述によれば、ラジャ・プテの兄弟にあたるムザファール・シャー(在位1445~59頃)³¹⁾であった。彼は領土を拡大し、「ケダの側〔マレー半島西岸、マラッカより北の部分〕ではミンジャンを手に入れた。(中略)この国には錫が産出し、(中略)マラカの朝貢国である。彼はまたサランゴールを占領した。それは「錫」という意味で、同じく良い場所」(『東』402頁。〔 〕内は訳注者による)であった。さらに半島東岸のトレンガヌ、バハンヤ、スマトラ島のロカン、カンバル、インドラギリ等の諸国を占領し、カンバル、インドラギリにはラジャ・プテの2人の娘を嫁がせて外戚関係を結んだ。シャムのアユタヤ朝との対抗関係において半島東岸を固め、さらに海峡兩岸を帯状に占領することで、貿易船の安全な通過を保障したのである。また錫は輸出品であっただけではなく、マラッカでの交易に用いられる基準通貨であった。

港市国家としての実態を生田滋はつぎのように評価している³²⁾。

31) ムザファール・シャーの評価については、前掲注20) 和田論文476頁を参照。

32) 生田滋「東南アジアの大航海時代」『岩波講座東南アジア史3-東南アジア近世の成立-』、岩波書店、2001年。78頁。

ムラカ王国は（中略）実際には海岸に形成されたいくつかの港市を支配していただけであって、いわば点と線を支配していただけであった。したがってムラカ王国は陸上に経済的な基盤を持たず、海賊活動と貿易を経済的な基盤としていたといえることができる。

しかし実際には、交易の中心点としての港を防衛するラインが「線」ないし「帯」として保持されていただけでなく、不十分とはいえ食料供給地プレタンや錫の産出地サランゴールは、領域性を有する「面」として港の背後に広がっていた³³⁾。マラッカ王国にみる港市国家の特性は、面的な領域性が希薄なことにあるのではなく、やや地政学的に表現すれば、『支配しようとする意思の表れ』における中心－周縁関係が、大陸型国家とは空間的に逆転している点にあるといえよう。そのような意味において、港市＝支配者層、後背地＝従属者層という二元構造から港市国家の領域性を論じた西尾寛治³⁴⁾の主張は、空間論的見地からも興味深い。

港市国家の港市と後背地の区別は明瞭であり、港市の外国人居留民と後背地の在地民とは、ほとんど接触しなかった。（中略）港市国家は本来的にそうした二元性を包摂した国家でもあった。（中略）従来、複合社会は植民地支配期の産物であると指摘されてきた。

しかし、それ以前の港市国家の時代に、少なくとも港市＝王都には、すでにそうした社会構造が形成されていた。

マラッカ王国の交易活動は、シャムからの陸伝いの侵入を防ぐ「国境」と、シャムに無謀な行動を許さない超越的大国としての明の權威によって保たれていた。では、明側はマラッカ王国をどのように認識していたのだろうか。前述の口語訳版『瀛涯勝覽』の「満刺加国」の項目にはつぎのような描写がある。

この国の東南は大海であり、西北は岸近くまで山が続いている。（中略）田はやせて収獲は少なく農耕する人もわずかである。一筋の谷川があり、その下流は王の居所の前を過ぎて海に入る。王様は川に木橋を造り、その上に二十余間の橋小屋を造って、そこでいろいろな物の売買をしている。（中略）

人々は漁撈を仕事としている。丸木の刳舟で海に出て魚を捕えるのである。（中略）花錫は二カ所の山から掘り出される。王様は頭目に命じて管理させ、人を派遣して精錬して斗のような金物にし、小塊にして役所にさし出させる。（中略）市場の交易にはみなこの錫を使うのである。（『瀛涯勝覽』63～64頁。以下引用文は『瀛』と略す。下線は筆者）

ここで前段は船上からの観察にもとづいているかもしれないが、後段はおそらく現地での聞き取りによる情報であろう。マラッカ王国成立後まもない当時、すでに港の後背地として重要

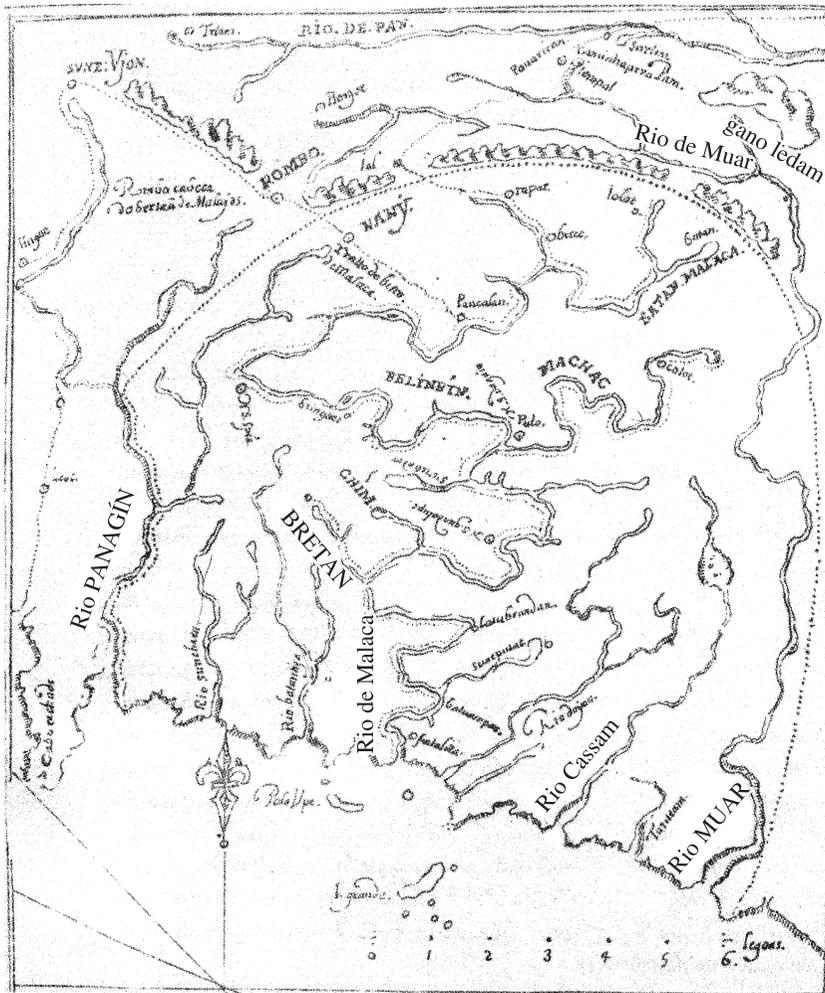
33) 和田久徳「東南アジアの都市と商業－マラッカ国の場合－」『中世史講座第3巻中世の都市』、学生社、1982年。265～291頁。和田はマラッカ王国最盛時の支配範囲を、(一)直轄地、(二)属領、(三)従属国と三分割している（同書272頁）。

34) 西尾寛治「17世紀のムラユ諸国」『岩波講座東南アジア史3－東南アジア近世の成立－』、岩波書店、2001年。151～178頁。

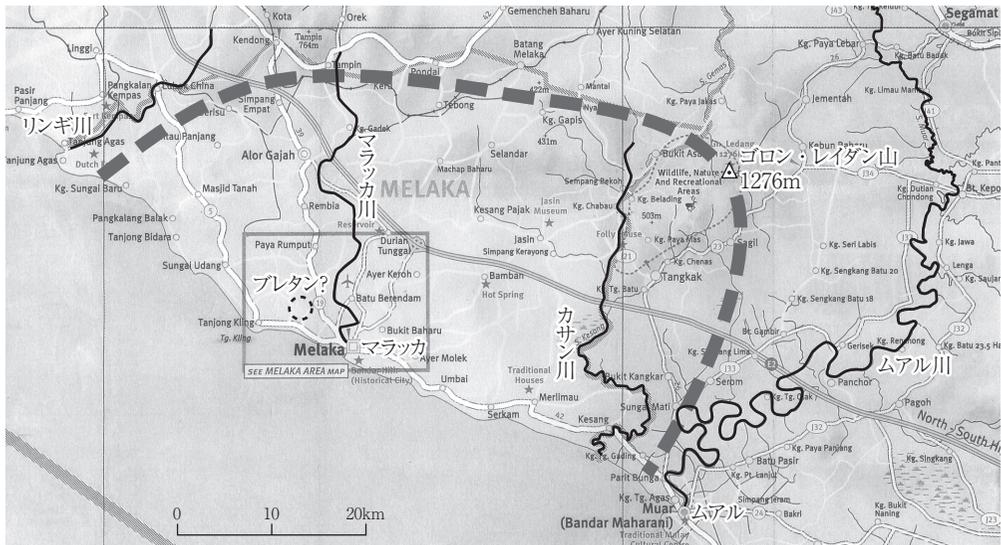
な意味を持つ領域は農地ではなく「花錫」鉱山であったことが読み取れる。

では、後背地の「範囲」を示す何らかの記述は残されていないのだろうか。ふたたびトメ・ピレス『東方諸国記』に戻るが、「第六部マラッカ」の「二 支配地域」には「マラカ市の境界」という小項目が立てられている。

マラカはケダに向かうウペ Upe の側ではアコアラ・ペナジ Acoala Penajy を境界としている。それは海に注ぐ河である。マラカの要塞からこの河口までは約四レグワある。またムアルに向かうイレル Iler の側ではアコアラ・カサン Acoala caçam を境界としている。要塞からこの境界までは約三レグワある。また内陸部に入ると一方の境界から他方の境界までは山の麓に沿って境界が走っている。この山はゴロン・レイダンと呼ばれていて、内



第3図 エレディアによるマラッカ地方図①（注25）文献による）



第4図 推定されるマラッカ直轄領

陸部の境界である。(『東』433頁。下線は筆者)

この地名比定に関しては訳者注が詳しい。それによればアコアラは Kuala すなわちマレー語の「川」の対音であり、アコアラ・ペナジは、エレディアの地図(e)ではパナジム川 Rio de Panagim と表記される。現在のリング川 Kuala Linggi に該当する。アコアラ・カサンも同様に、エレディアの地図ではカサム川 Rio Cassam と表記され、現在もカサン川と呼ばれている。この川はムアル川より若干マラッカ寄りの川である(第3図)。ところが『マラヤ年代記』の記述では、「〔東は〕アイエル・レレ Ayer Lele からウル・ムアル Hulu Muar まで、〔西は〕カンボン・クリン Kampong Keling からクアラ・ペナジュ(=アコアラ・ペナジ)まで住居が絶えない」と記しているのので、王国時代の直轄領として、西をリング川、東をムアル川、北をゴロン・レイダ山麓に囲まれ、南は海峡に面した、直径7レグワ(約49km)の半円形を描きうる(第4図)。

これに加えて、マラッカ川兩岸に王都として的高密度な空間が存在していたならば、マラッカ王国の領域性として、交易の中心たる王都地区と、それを支える後背地としての直轄領、さらに外縁の防御ラインを留める画鋲のような支配港という三層構造を想定しうる。

(2) 王都の空間構造

前述のように、初代王パラメスワラは即位時すでにかなりの高齢であり、二代目シャケン・ダルシャーが王宮を造営した。そこはマラッカ川河口部左岸(東側)にあたる孤立丘陵で、今日ではポルトガル領時代の寺院名に因んで「セントポールの丘」と呼ばれている。眼下に港湾

地区のみならず海峡を一望できる絶好の場所であり、ポルトガルによるヨーロッパ式の城塞も、オランダの提督府も、イギリスの海峡植民地行政府もすべてこの丘上に築かれた。このような地形と城館との位置関係は、エレディアの地図にみるムアル川河口部の状況に酷似しており、パラメスワラがムアルからマラッカへの移住を決断した際にも、有利な判断につながったのではないかと推測される。

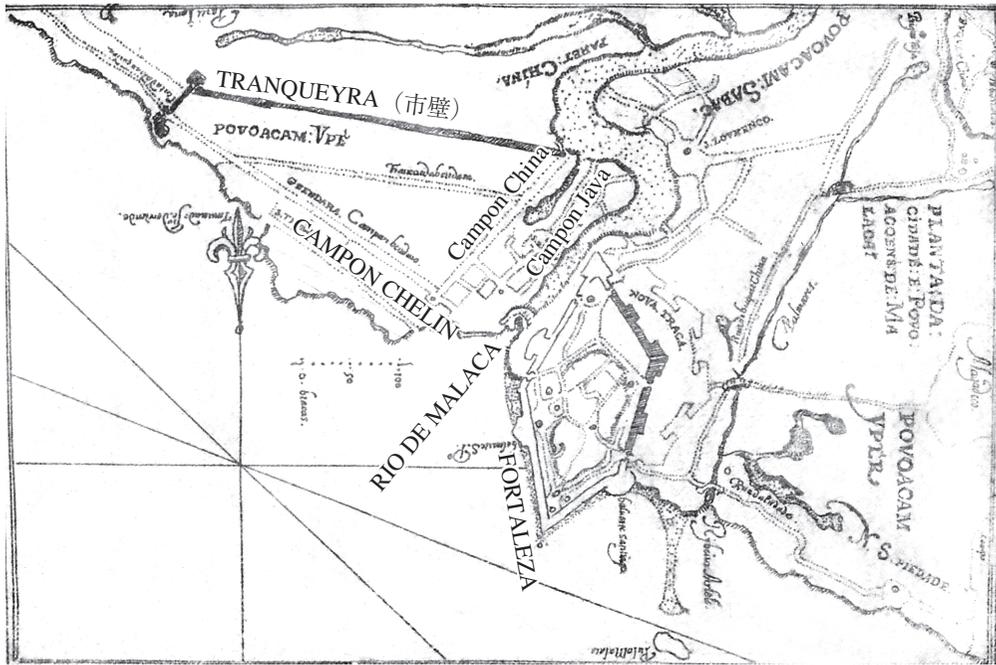
パラメスワラは建国直後の1403年に早くも明の「招輸使」を受け入れ、2年後には「満刺加国王」に封じられた³⁵⁾。シャムによる北方からの侵攻に対抗するために、明の庇護を求めたのである。そのことは2代目シャケン・ダルシャーの夫人を通じての姻戚関係やそれに伴う中国人貴族居住区の形成にもつながった。セントポールの丘から約1 km 北東に位置する標高45 mのブキツ・チナ山 Bukit China (三保山) は、その名が示すように中国に縁のある山で、「きれいでおいしい水のあるボカ・シナ山」(『東』391頁)に該当する。山麓に湧出する「三保井」は、中国人女性の名に因んでハンリ・ポー Hang Li Poh の井戸(『東』補注592頁)とも呼ばれ、鄭和が遠征の際に立ち寄ったという伝説も残る。王宮から北東側、半径約1 kmの一带が、マラッカ王統に協力的な中国系貴族と、護衛軍である海賊セラテ人の居住地に指定されたのである。

シャケン・ダルシャーは、(中略)立派な家を山の頂上に建て、平地には現在徴税人の倉庫のある橋の反対側の所に、彼の義父〔のマンガリ〕と約三百人の住民を住ませた。その他の人々は彼の父といっしょにブレタンに住んでいた。彼はできるだけマラカに人を住ませようと努力したので、アル(ウル)の沿岸の人々や、セラテ人の海賊や、その他の漁師のような他の場所の人々が来るようになった。こうして彼が来てから三年たつと、マラカは二千人の住民を持つ町になった。

(中略) 彼はブレタンの人々に、農民のような人々だけをそこに残して〔マラカに〕来るように命じ、(中略)セラテ人のマンガリにマラカの山の麓を全部与え、今日のようにマラカを守るために備えた。(中略) シャケン・ダルシャーが王になった時には、すでに六千人の住民がマラカに住んでいた。(『東』393頁。〔 〕内は訳注者による。下線は筆者)

このように、2代目シャケン・ダルシャーの時代に、王都としての基本設計はかなり具体化されたとみてよいだろう。すなわち、マラッカ川左岸は王侯・貴族・兵士の居住区であり、右岸は商人や漁民の居住区として区別されたのである。両者を結ぶ河口部の橋は、上記の『東方諸国記』に「徴税人の倉庫のある橋」とあるが、前掲『瀛涯勝覧』にも「王様は川に木橋を造り、その上に二十余間の橋小屋を造って、そこでいろいろな物の売買をしている」と記される

35) 『太宗実録』永楽元年(1403)十一月丁巳に尹慶らの一行が「満刺加国」を訪問し、永楽三年(1405)九月癸卯に帰国した際に、「満刺加国酋長拝里迷蘇刺」(パラメスワラ)の「使臣」が入貢したので、これに対し国王の印を与えた(『東』補注587頁)。



第5図 エレディアによるマラッカ市街図①(注25)文献による)

ように、一時的な積み荷保管を含めた税関的機能、今日の港湾用語でいえば「保税上屋」を兼ねる多機能的な橋であった。

エレディアの地図に描かれる、河口部のアーチ型の橋から200mほど上流の蛇行部右岸が「ジャワ人」の居住区であり、その手前の広場は市場であった(第5図)。しかし沖合いで停泊する大型帆船はこの橋をくぐれない。もとより、マラッカ海峡を東から西へ通過する貿易船は、積み荷に応じたマラッカ国王への「贈り物」を届けるだけであり(『東』464頁)、積み荷を陸揚げして検査を受けるようなことはなかった。支払うのは関税ではなく、いわば海賊集団に対する「みかじめ料」であった。橋の上ではそのような高級贈答品が開陳され、橋の下ではマラッカの生活物資を積載して満潮を利用しながら市場まで遡ろうとする近隣諸国の「ジュンコ」(ジャンク=小型帆船、『東』464頁)が「入港手続き」を受けていたのではないだろうか。海峡を西から東へ通過する船には税が課せられたから、それらはマラッカの「市場」で売りさばかれ、「ジュンコ」に積まれて東側諸国に回漕されたのであろう。河口部の橋は、平時は不正な取引や不審者の侵入を王都の入り口で防ぐチェックポイントとして機能しながら、緊急時には王宮地区を市街地から切り離すという、〈結ぶ/切る〉両義性を持っていたのである。

港湾の安全管理がいかに重要であるか。『瀛涯勝覧』は、高価な交易品を満載した鄭和の「宝船」が寄港するときの警備ぶりをつぎのように伝えている。

城垣のような柵を作り、四つの門、物見櫓（更鼓楼）などを設け、夜は鈴を鳴らして巡邏し、中には二重の柵を立てて小城のようである。そして倉庫を作って一切の銭や食糧を入れておき、各地に行く船舶がここに来ると交易物を取り出し、そろえてから船に積み込み、南の風の具合を窺って五月中旬に航海を開始し中国に向かったのである。（『瀛』 65～66 頁。（ ）内は訳編者による）

マラッカ川河口部の橋は屋根付きであり、ときに税吏や兵士が駐在し、緊急時に備えた可能性もあるだろう。現地を観察しても川幅は 20 m に満たず、たとえ通船のためとはいえ、この程度の長さの橋桁を保持するために、強度の大きい構造橋を構築したとは考えにくい。時代も場所も異なるが、中世ベトナムの河港町ホイアンの西端に架かる「来遠橋」（別名「日本橋」）が屋根付きであった理由は、菊池誠一が推定した「新開地としての外人居住区」³⁶⁾との境界に架けられたものであったならば、橋が交易の場と監視小屋を兼ねていたと考えることはあながち無理ではない。屋根はその下に常駐する者のために付されたと思われる。

このようにみれば、「港市国家」の典型例として、ともすれば港の一点のみが注目されがちなマラッカ王国においても、港湾の経済を支えていたのは〈外部〉としての対岸・近隣の属国だけではなく、背後の「内陸」地域も含めた多重的な領域構造であったことを再確認しなければならない。むしろ港市国家たるゆえんは、国家的機能の港への一点収斂性にあるのではなく、大陸型国家とは逆に、《支配しようとする意思の表れ》が領土の中央部ではなく縁辺部たる水域においてこそ具現化する点にあると、言い換えることができる。

マラッカの港は、シャムからの侵攻を防ぐ「外港」と、食料の供給を担った「直轄地」と、王都の危機管理思想を反映した階層別「居住区」を〈結ぶ／切る〉橋の、三重の防御装置によって守られていた。それは当時のインド洋－南シナ海システムを構成する友好と敵対の、交易と交戦の、中立域としての柔構造を表象するものであった。今後も引き続き、上記諸文献のさらなる分析を通じて、マラッカ王国の空間的特性を明らかにしていきたい。

〔付記〕

本稿は、2004 年度追手門学院大学共同研究「アジアの市場（いちば）の現状と背景」（研究代表者奥田尚）による研究成果と、平成 16～18 年度科学研究費基盤研究（A）(1)「東アジアとその周辺地域における伝統的地理思考の近代地理学の導入による変容過程」（研究代表者：千田稔）による研究成果から再構成したものである。

36) 菊池誠一『ベトナム日本町の考古学』高志書院、2003 年、105 頁。なお現地で観察するかぎり、「来遠橋」が架かる小川も幅 20 m に満たず、重量構造橋にせざるを得ない合理的な理由を想定しにくい。